

研究成果の刊行に関する一覧表

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
齋藤 滋、丸山哲夫、田中忠夫、竹下俊行、山田秀人、小澤伸晃、中塚幹也、木村正、福井淳史、杉俊隆	血栓性素因のある不育症に対するヘパリンカルシウム自己皮下注射の安全性についての検討.	日本産婦人科・新生児血液学会誌			2011 in press

分担研究報告 3

平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金(成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業)
分担研究報告書

分担課題:本邦における不育症患者の頻度調査

研究分担者 杉浦真弓 名古屋市立大学大学院医学研究科教授
研究協力者 鈴木貞夫 名古屋市立大学公衆衛生学教授
研究協力者 尾崎康彦 名古屋市立大学大学院医学研究科准教授
研究協力者 北折珠央 名古屋市立大学大学院医学研究科助教

研究要旨

本邦において習慣流産は 0.9%、不育症は 4.2%の頻度であり、妊娠経験者の 38%が流産を経験していることが明らかとなった。不育症患者数は(2 回以上連続流産として、既往も含めて)140 万人、年間約 3 万組が発症していると推定する。

流産、不育症経験者は流産経験のない女性よりも離婚率が高いことが明らかになった。流産はありふれた妊娠合併症であり、不育症患者の 9 割が生涯出産可能なことを国民に啓発する必要がある。

A. 研究目的

不育症は、妊娠はするけれど流産・死産によって生児を得られない場合をいい、3回以上連続する流産を習慣流産という。習慣流産の頻度は欧米の古い文献で約1%とされているが、本邦での頻度はまったく調査がされていない。不育症の実態を知る上で頻度の調査は極めて重要である。

B. 研究方法

愛知県岡崎市において生活習慣と遺伝子多型に関する文部省科学研究が名古屋市立大学公衆衛生学講座(研究代表者:鈴木貞夫)によって実施中である。健康診断を受ける 35 歳から 79 歳の一般市民に対する調査であり、問診表に妊娠歴を加えることで頻度が計算できる。本研究は名古屋市立大学倫理委員会の承認を得た。

C. 研究結果

2010 年 6 月の時点でコホート数:6086 名、女性:2733 名

妊娠あり:2503 名(平均 2.96 回)

流産あり:953 名(38.1%)

2 回以上連続流産あり:105 名

3 回以上連続流産あり:22 名

したがって、習慣流産は 0.88%、不育症は 4.2%、妊娠経験者の 38%が流産を経験していた。

BMI は流産、不育症ともに影響を与えなかった。20

歳の月経不順が強い人ほど不育症頻度が増加した($p=0.04$)。

離婚経験は流産なしの 3.0%に対し、流産経験者 5.1%、不育症 8.8%であり、流産が夫婦関係に深刻な影響を及ぼしていることが明らかになった($p=0.015, 0.016$)。

しかし、現在の健康感是不育症 74.4(14.2)、流産経験者 75.1(14.8)、流産なし 75.7(13.3)であり、流産と関係がなかった。また、現在の幸福度は不育症 78.1(14.7)、流産経験者 79.7(14.9)、流産なし 79.4(14.6)であり、流産と関係がなかった。

不育症経験者の 95.2%(100/105)が出産し、89.5%(94/105)が授乳していることが明らかになった。

D. 考察

2007 年人口統計から 35-79 歳女性の数は 3681 万人であり、2 回以上連続流産した女性は $\times 105/2733=141$ 万人

1年あたりの発症数はこれを 45 年で割って 31,427 組/毎年という計算が成り立つ。ただし 45 年間で出産数は減少し、妊娠女性の高齢化により流産率は増加しているため補正は必要である。

不育症(2 回以上連続流産として)患者数 140 万人、年間約 3 万組の発症数と推定できる。

欧米では BMI が流産、不育症と関係するという報告が散見されるが、本邦での関係は明らかではなかった。日本人は Caucasian ほど肥満が著名ではなく、

やせの問題もあり、単純な解析では明確にすることが出来ないと考えられた。

黄体機能不全は名古屋市立大学でも反復流産患者の 23%にみられることが判っている。黄体期中期の progesteron 値によってその後の流産を予知することはできなかつた。また、progesteron 投与が不育症患者の生児獲得率を改善するというデータもない。しかし、20 歳の月経不順が強いほど不育症頻度が多いということは、内分泌の関与は明らかであり、多のう胞性卵巣症候群、黄体機能不全に関する今後の検討が必要と考えられた。

流産、不育症は離婚頻度を増加させることが明らかになった。流産は男性より女性の精神的影響度の高い疾患であり、夫婦関係に影響を及ぼすという報告は多いが、離婚率も上昇させるほど深刻なものであるなら、流産が極めてありふれた妊娠合併症であり、その後の出産が十分できることを国民に啓発することが重要と考えられた。

不育症経験者の少なくとも 89.5%が生児を得ていることが明らかになった。本研究では死産を出産に含めて回答している者もいると推定されるため、95.2%の出産の中には生児を得ていないものがあるかもしれないが、母乳を与えた経験者が 89.5%存在することは少なくともこれだけは生児を得ていると言える。「子宮奇形研究」において不育症患者の 85.5%が生児獲得していることを報告した。奇形研究では流産後に通院を辞めた患者を「失敗」としているため、85.5%にとどまったが、岡崎コホート研究では生涯出産は不育症患者でも少なくとも約 9 割が可能であることを示した。

鈴木貞夫氏は問診表のなかに人工妊娠中絶術について記載したくないとしてこれを加えなかつた。そのため、流産の中に人工流産が入っている可能性を指摘している。しかし、日本語として「流産」との質問に対し、「中絶」を加えて考えることは日本人女性ではほとんどないと推測する。

E. 結論

本邦において習慣流産は 0.9%、不育症は 4.2%の頻度であり、妊娠経験者の 38%が流産を経験していることが明らかとなった。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

執筆中

2. 学会発表

第 63 回日本産科婦人科学会発表予定

分担研究報告 4

分担課題: 不育症における子宮奇形のimpact

研究分担者 杉浦真弓 名古屋市立大学大学院医学研究科教授
研究協力者 尾崎康彦 名古屋市立大学大学院医学研究科准教授
研究協力者 北折珠央 名古屋市立大学大学院医学研究科助教
研究協力者 鈴木貞夫 名古屋市立大学大学院医学研究科教授

研究要旨

不育症患者の精査後初回妊娠において双角子宮、中隔子宮をもつ患者の 59.5%、正常子宮を持つ患者の 71.7%が生児獲得した。子宮奇形を持つ患者は有意に染色体正常流産を経験していた。子宮奇形患者において欠損が大きく、残りの空洞が狭いほど成功率が低下することが世界で始めて明らかとなった。

累積成功率を調査した結果は 78.0%, 85.5%であり、染色体異常、子宮奇形のない患者の 85%が出産に至っていることがわかった。

A. 研究目的

子宮奇形は正常分娩歴のある女性よりも不妊症、さらに反復流産患者に高頻度にみられる。そのため、双角子宮、中隔子宮に対して形成手術がおこなわれている。しかし、反復流産患者において子宮奇形が見つかった場合にその後の生児獲得率を子宮正常の患者と比較して検討した研究はない。

B. 研究方法

1986年から2007年に不育症精査のために名古屋市立大学を受診した1676組の夫婦について子宮卵管造影を行い子宮奇形の頻度を調べた。さらに子宮奇形をもつ患者と子宮正常の患者のその後の妊娠帰結を比較検討した。

C. 研究結果

1676人のうち、54人(3.2%)に弓状子宮を除く子宮奇形を認めた。精査後初回妊娠において双角子宮、中隔子宮をもつ患者の 59.5%(25/42)が生児獲得し、子宮奇形および夫婦の染色体異常を持たない患者の 71.7%(1096/1528)が生児獲得した($p=0.084$)。さらに累積成功率を調査した結果は 78.0%, 85.5%であり、有意差は認められなかった。しかし、流産絨毛の染色体異常率は 15.4% (2 of 13) と 57.5% (134 of 233)であり、子宮奇形を持つ患者は有意に染色体正常流産を経験していた。さらに子宮奇形患者において中隔の深さを D、残りの空洞の高さを C とするとき、流産

群の D/C 比は出産群の D/C よりも有意に大きいことが判明した($p=0.006$)。

D. 結論

先天性子宮奇形は不育症において悪影響があり、胎児染色体正常流産を起こすことが明らかとなった。しかし、子宮奇形があっても必ず流産するわけではなく、子宮腔の欠損が大きいかほど流産しやすいことが世界で始めて明らかになった。

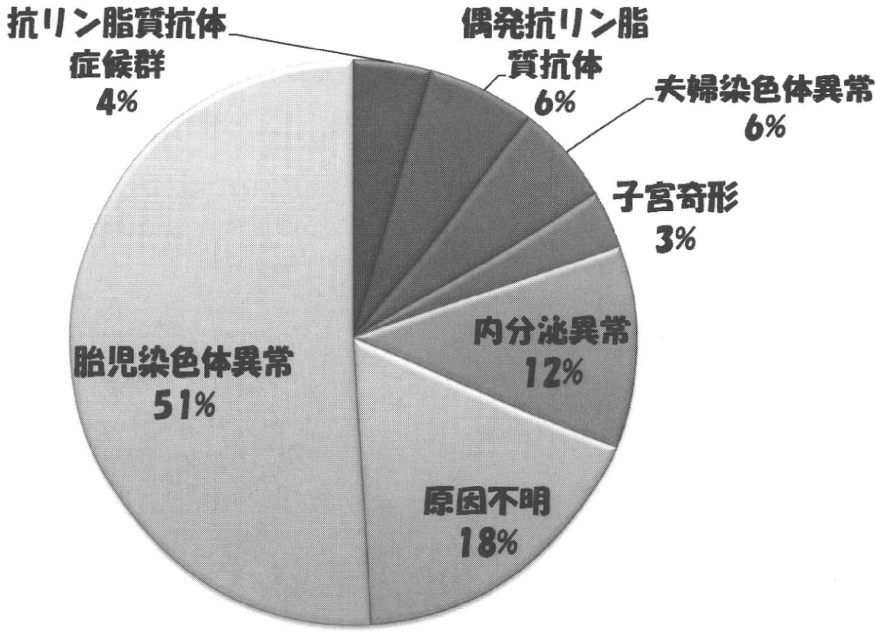
E. 研究発表

1. 論文発表

Sugiura-Ogasawara M, Ozaki Y, Kitaori T, Kumagai K, Suzuki S. Midline uterine defect size correlated with miscarriage of euploid embryos in recurrent cases. Fertil Steril 2010. 93(6): 1983-8.

不育症頻度調査
不育症 4.2%、習慣流産 0.9%
流産経験者 38%
不育症 140 万人と推定

名古屋市立大学の 1676 組の不育症患者の異常頻度



研究成果の刊行に関する一覧表

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Sugiura-Ogasawara M, Ozaki Y, Kitaori T, Kumagai K, Suzuki S.	Midline uterine defect size correlated with miscarriage of euploid embryos in recurrent cases.	Fertility and Sterility	93	1983-8	2010

分担研究報告 5

分担課題:子宮奇形を持つ反復流産患者の妊娠帰結調査
手術・非手術の比較多施設共同研究

主任研究者 齋藤 滋 富山大学大学院医学薬学研究部教授
分担研究者 杉浦真弓 名古屋市立大学大学院医学研究科教授
分担研究者 竹下俊行 日本医科大学教授
研究協力者 杉 俊隆 東海大学医学部非常勤教授
分担研究者 丸山哲夫 慶應義塾大学医学部講師
分担研究者 小澤伸晃 国立成育医療研究センター医長
分担研究者 中塚幹也 岡山大学大学院保健学研究科教授
分担研究者 藤井俊策 むつ総合病院産科婦人科産科部長
研究協力者 西田正人 霞ヶ浦医療センター病院長
研究協力者 林 保良 川崎市立川崎病院婦人内視鏡科部長

研究要旨

子宮奇形に対して手術が実施されているが、不育症患者に対する子宮形成術が生児獲得に寄与しているというエビデンスはない。中隔子宮に対する内視鏡的中隔切除術は生児獲得のために有効であった。双角子宮に対する形成術の有効性は明らかにできなかった。本研究は手術の有効性を Evidence level II の研究デザインによって世界で初めて示すことが出来た。

A. 研究目的

「不育症における子宮奇形の impact」研究により双角子宮、中隔子宮が次回妊娠に影響があることが明らかになった。これらの子宮奇形に対し形成手術が実施されているが、合併症もあり、手術が生児獲得に寄与しているかどうか検討した報告は世界中に存在しない。

B. 研究方法

2002年1月から2007年12月に不育症精査のために受診した患者に子宮卵管造影を行い双角子宮、中隔子宮、単角子宮、重複子宮を持つ患者をエントリーし、手術・比手術例について

- ① 診断後初回妊娠成功率
- ② 不妊症率
- ③ 累積生児獲得率

を比較検討した。本研究は名古屋市立大学倫理委員会承認を得た。

C. 研究結果

227人が子宮奇形を持つ不育症患者として登録された。患者背景は Table 1 に示した。56人は双角子宮(1名は転座保因者)、145人は中隔子宮、12人は単角子宮、14人は重複子宮だった。

中隔子宮の39人は開腹形成手術、88人はTCRを受けた。双角子宮の16人は開腹形成手術、3人はTCRを受けた。単角子宮の1人は開腹形成手術を受けた。

妊娠帰結は Table 2 に示した。中隔子宮について、手術群 81.3% (78/96)、非手術群 53.8% (7/13)が診断後初回妊娠で出産できた(p=0.025)。双角子宮について、手術群 66.7% (8/12)、非手術群 75.0% (21/28)が診断後初回妊娠で出産できた(NS)。単角子宮について、手術をしたものを含めて妊娠した6人はすべて出産できた。重複子宮について、45.5% (5/11)が診断後初回妊娠で出産できた。

観察期間中の累積生児獲得率は、双角子宮手術群 75.0% (9/12)、非手術群 82.1% (23/28)、中隔子宮手術群 85.4% (82/96)、非手術群 61.5% (8/13)であった。

観察期間中の不妊率は双角子宮手術群 14.3 %、非手術群 6.7 %、中隔子宮手術群 12.7 %、非手術群 13.3 %であった。

観察期間中のすべての患者あたりの生児獲得率は双角子宮手術群 64.3 %、非手術群 76.7 %、中隔子宮手術群 74.5 %、非手術群 53.3 %であった。

D. 考察

中隔子宮においては手術によって、診断後初回妊娠、累積生児獲得率ともに改善されることが明らかになった。

子宮奇形に対する開腹形成手術は 1882 年に報告された。その後術式の工夫がなされ、中隔子宮に対しては内視鏡による中隔切除が主流である。この手術は開腹に比較して負担が少なく、しばしば行われてきた。しかし、対照が設定されていない研究しかなく、本研究で初めて手術・非手術の比較が出来た意義は極めて大きい。

手術後の不妊症も心配されたが、本研究結果によれば手術の影響はさほど大きいと考えなくていいと思われた。

また、双角子宮は開腹手術が行われているが、生児獲得率が改善できないことが明らかになった。

現在、双角子宮、中隔子宮、弓状子宮を鑑別する世界標準的基準が存在しない。また、本研究の施設での診断方法、術式の統一も困難であった。ただし、子宮奇形を 227 人集めて解析した研究という視点でも本研究は世界で初めての貴重な研究である。

本研究をきっかけに世界の多施設研究によるさらに症例数の多い case-control study が待たれる。

E. 結論

中隔子宮に対する内視鏡的中隔切除術は生児獲得のために有効である。双角子宮に対する形成術の有効性は明らかにできなかった。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表
投稿中
2. 学会発表
発表準備中

Table 1 Baseline characteristics of patients with congenital uterine anomalies

	Patients receiving surgery (n=147)	Patients receiving no surgery (n=80)	p
Maternal age Mean (SD)	33.0 (4.5)	32.0 (4.3)	NS
Number of previous miscarriages	2.73 (1.59)	2.68 (1.04)	NS
0	16	2	
1	4	2	
2	52	35	
3	35	28	
4	25	8	
5	9	4	
6	1	1	
7	4	0	
8	0	0	
9	1	0	
No. of previous stillbirths	0.22 (0.60)	0.13 (0.43)	NS
0	123	73	
1	19	4	
2	4	3	
5	1	0	
No. of previous live births*	0.12 (0.44)	0.09 (0.28)	NS
0	133	73	
1	12	7	
3	2	0	
The D/C ratio before surgery	0.97 (1.0)	0.74 (0.74)	NS

*Including preterm births

Table 2 Comparison of successful pregnancy outcomes between patients with and without surgery

	Bicornuate (n=56)			Septum (n=145)		
	With surgery (n=19)	Without surgery (n=37)	p	With surgery (n=127)	Without surgery (n=18)	p
Mean age (SD)	32.0 (4.0)	31.1 (4.3)	NS	33.0 (4.2)	33.2 (4.1)	NS
No. of previous miscarriages	2.79 (1.99)	2.80 (1.11)	NS	2.72 (1.54)	2.89 (1.05)	NS
No. of previous stillbirths	0.37 (1.16)	0.14 (0.49)	NS	0.20 (0.47)	0.11 (0.32)	NS
No. of previous live births	0.16 (0.37)	0.06 (0.24)	NS	0.12 (0.45)	0.11 (0.32)	NS
No. of patients who could be followed up	14	34*		115**	15	
Live birth rate at the first pregnancy after examination	66.7 % (8/12)	75.0 % (21/28)	NS	81.3 % (78/96)	53.8 % (7/13)	0.025
Abnormal embryonic karyotype	0/0	1/4		1/1	2/3	
Infertile after diagnosis***	2 (14.3 %)	2 (6.7 %)	NS	14 (12.7 %)	2 (13.3 %)	NS
Cumulative live birth rate	75.0 % (9/12)	82.1 % (23/28)	NS	85.4 % (82/96)	61.5 % (8/13)	0.049
Cumulative live birth rate per patient	64.3 % (9/14)***	76.7 % (23/30)	NS	74.5 % (82/110)	53.3 % (8/15)	0.086

*One patient with a bicornuate uterus was terminated at 20 weeks' gestation because of fetal anomaly. One patient with a bicornuate uterus and translocation miscarried because of unbalanced chromosomes. **One couple did not try to conceive. These cases were all excluded from the analysis.

***Infertile was determined as not pregnant after one year trying to conceive.

7 patients are trying to conceive now. We could not follow up outcomes of 27 patients after diagnosis.

分担研究報告 6

分担課題:不育症における抗フォスファチジルエタノールアミン抗体測定意義

研究分担者	杉浦真弓	名古屋市立大学大学院医学研究科教授
研究協力者	尾崎康彦	名古屋市立大学大学院医学研究科准教授
研究協力者	大林伸太郎	名古屋市立大学大学院医学研究科大学院生
研究協力者	杉 俊隆	東海大学医学部非常勤教授
研究協力者	鈴木貞夫	名古屋市立大学大学院医学研究科教授

研究要旨

抗 PE 抗体は aPTT を用いたループスアンチコアグラントと共陽性を示す症例は存在するが、国際基準にある抗リン脂質抗体 β 2glycoproteinI 依存性抗カルジオリピン抗体 (β や RVVT を用いたループスアンチコアグラントとは異なる患者で陽性を示した。薬物投与のない 181 例において抗 PE 抗体陽性・陰性群の間に生児獲得率の差はみられなかった。

抗 PE 抗体は陽性率は高いが、偽陽性が多く、抗リン脂質抗体症候群を検出できないため、利用する場合に注意が必要と思われた。

A. 研究目的

抗フォスファチジルエタノールアミン抗体 (PE 抗体) は国際学会が推奨する β 2glycoproteinI 依存性抗カルジオリピン抗体 (β 2GPI-aCL)、aPTT や RVVT を用いたループスアンチコアグラント (LA) と比較して陽性率が高いため、本邦では広く測定がおこなわれている。しかし、PE 抗体が陽性のときに実際に流産の帰結をたどるのか、前方視的な検討は少ない。本研究では不育症患者における PE 抗体の意義を調べることを目的とした。

B. 研究方法

1999 年から 2007 年に不育症精査のために名古屋市立大学を受診した 367 人について系統的精査を行い、58 人に従来法の aPLs を認めた。これらと一部の原因不明症例に対し、抗凝固療法を行った。181 人は薬物投与を行わなかった。

初診時凍結保存した血清を用いて PE 抗体を測定し、従来法の aPLs との関係、妊娠帰結を調査した。

C. 研究結果

PE 抗体は β 2GPI-aCL、RVVT -LA とは全く関係がなかったが、aPTT-LA とは一部交差反応を認めた。

薬物投与を行わなかった 181 人の妊娠帰結を調査したところ PE 抗体陽性・陰性の間に生児獲得率の差はみられなかった。胎児染色体異常を除いても結果は変わらなかった。4 種類の PE 抗体の基準値と妊娠帰結について ROC を作成したところ AUC はそれぞれ 0.535, 0.612, 0.546, 0.533 であり、いずれの検査も診断的価値がないという結果であった。

D. 考察

名古屋市立大学では研究室において国際学会が推奨する方法である aPTT-LA の測定を行っており、PE-IgG と両方陽性を示す症例は 8 例あり、これは抗凝固療法を行った。したがって、aPTT-LA と交差反応を示す症例の評価は困難である。

Yamada らは正常妊婦における前方視的検討で PE-IgG が妊娠高血圧症候群の危険因子であることを示した。Gris らは PE-IgM が子宮内胎児死亡の危険因子であることを証明したが、本邦の測定法とは若干異なっており、本邦で行われている抗 PE 抗体測定法が不育症の危険因子であるかどうかは、本研究で結論づけることは困難であった。本測定法が陽性率は高いが、偽陽性が多いと推測されるため、測定法の工夫と aPTT-LA を実施していない施設における前向き研究が必要である。

E. 結論

抗 PE 抗体は国際学会の診断基準にある RVVT-LA、 β 2glycoproteinI 依存性抗カルジオリピン抗体とはまったくかい離した患者において陽性を示した。aPTT-LA 陽性の患者と共陽性の部分を除いた抗 PE 抗体単独陽性の症例は陽性・陰性の生児獲得率の差はなく、LA 測定を行っている場合の意義はないものと思われた。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

Obayashi S, Ozaki Y, Sugi T, Kitaori T, Suzuki S, Sugiura-Ogasawara M.

Antiphosphatidylethanolamine antibodies might not be independent risk factors for further miscarriage in patients suffering recurrent pregnancy loss. 2010. 85(2):186-92.

研究成果の刊行に関する一覧表

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Obayashi S, Ozaki Y, Sugi T, Kitaori T, Suzuki S, Sugiura-Ogasawara M.	Antiphosphatidylethanolamine antibodies might not be independent risk factors for further miscarriage in patients suffering recurrent pregnancy loss.	J Reprod Immunol	85	186-92	2010

分担研究報告 7

分担課題: 反復流産患者における抑うつ調査

研究分担者 中野有美 名古屋市立大学大学院医学研究科助教
研究協力者 古川壽亮 京都大学大学院医学研究科教授
研究分担者 杉浦真弓 名古屋市立大学大学院医学研究科教授
研究協力者 尾崎康彦 名古屋市立大学大学院医学研究科准教授
研究協力者 北折珠央 名古屋市立大学大学院医学研究科助教

研究要旨

不育症患者の 15.4%に臨床的に問題となる抑うつ、不安障害が存在することが明らかになった。過去の K6 を用いた研究から日本人一般集団の同症状は 1.9%であることが判っており、子どものいない不育症患者に明らかに精神疾患が高頻度に発症することが証明された。K6 のスコアは系統的精査、次回妊娠成功率の説明を受けた後に有意に改善した。不育症患者が専門医に相談することが Tender loving care となっている可能性が示された。

A. 研究目的

流産後に約 10%の患者が大うつ病に罹患することが報告されている。1995 年の名古屋市立大学の反復流産患者の研究では抑うつの強い患者はさらに流産を繰り返しやすいことが判明した。本研究では不育症患者の抑うつ頻度、不育症患者が精査を受け、次回妊娠について説明を受けることで抑うつが改善されるかどうか、さらに持続する抑うつが認知行動療法によって改善するかどうかを調査する。本邦に 4.2%の頻度で存在する不育症患者の抑うつを改善し、出産可能とすることは、出産可能年齢の女性の QOL 向上に寄与し、少子化に歯止めをかけることに直結する。

B. 研究方法

名古屋市立大学に反復流産の原因精査のために来院した子どものいない不育症患者 305 人を対象とした。

- ① 初診時に K6、symptom checklist 90 revised(SCL-90-R)、過去の流産の精神的影響度 EI を調べ、抑うつの頻度を推定、SCL-90-R との相関によって K6 の有用性を確認した。
- ② 精査が終了した時点で結果を説明し、次回妊娠成功率を具体的に説明した。その後、2 週間で再度 K6 を行い郵送してもらった。本研究は名古屋市立大学の倫理委員会の承認を得た。

C. 研究結果

初診時の調査を 305 人に行った。K6 は SCL-90-R の抑うつ、不安、敵意、強迫症状、対人過敏、恐怖症性不安、妄想観念、身体化症状、精神病性症状のすべてと相関した。

15.4%の患者に臨床的に問題になる抑うつ、不安障害を認めた。過去の K6 を用いた日本人一般集団の 1.9%に同症状が存在することから、不育症患者に抑うつが高頻度に発症することが明らかになった。

EI は 3 回流産している人で 2 回目に高くなる事が判った(Table 1)。また、EI は化学流産、初期流産、子宮内胎児死亡の順に妊娠期間が長くなるほど高くなった。

原因別では子宮奇形、転座を指摘されている人の抑うつ、不安が抗リン脂質抗体陽性者よりも強いことが明らかになった(Table 2)。

抑うつスコアは 1 回目より 2 回目に低下した。

D. 考察

不育症患者の 15.4%に臨床的に問題となる抑うつ、不安障害を認めた。過去の K6 を用いた研究から日本人一般集団の 1.9%に同症状が存在することから子どものいない不育症患者が抑うつに罹患しやすいことが明らかになった。

次回妊娠の具体的な成功率に関する説明を受けることで K6, Depression のスコアは有意に低下した。本研究では対照の設定がないため、流産後の時間経

過とともに自然軽快したとも考えられるが、最後の流産からの時間と初診時 K6 に関係がないことから、必ずしも時間経過だけではないと推定する。

転座や子宮奇形がある患者の抑うつは説明後も軽快しないことが分かった。抗リン脂質抗体症候群は若年性脳梗塞、心筋梗塞を起こし、寿命が短い難治性疾患であるが、抗凝固療法により、生児獲得は約 80%に得られている。結果説明の段階で「寿命が短い」ことまで説明していないため、治療ができること、出産可能であることによって気持ちが前向きになっていることが考えられる。

K6 は極めて簡単なスクリーニング検査であり、今後は臨床的に認知行動療法確立のために有用と考えられた。

E. 結論

不育症患者の 15.4%に抑うつ、不安障害がみられた。K6 は SCL-90-R と関連し、不育症での有用性が確認できた。専門医を受診し、次回妊娠についての説明を受けることが TLC となる可能性が示された。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

Sugiura-Ogasawara M, Nakano Y, Ozaki Y, Furukawa AT. Systematic examination and explanation of live birth rates can improve mental distress among women with recurrent Miscarriage. Submitted.